



いきがい工

東京タワーが開業50周年を迎えた2008年12月23日、多摩川に近い川崎市高津区の工場で、もう一つの

50年を祝う拍手が響いた。社員らの笑顔の輪の中心で涙ぐんでいるのは林緋紗子さん(64)。チョーク製造大手の日本理化学工業が半世紀前、初めて採用した知的障害者2人のうちの1人だ。

林さんは15歳の時、養護学校から職業体験に来た。休憩のチャイムに気づかな

いほど夢中で働いた。そのいちずさが同世代の子を持つ社員の胸を打った。2週間たった最終日、採用を考えていなかった人事担当者を社員たちが囲んだ。「私たちが面倒をみますから、一緒に働かせてあげて」

健常者に比べれば、作業を覚えるまで時間はかかる。記憶したり数えたりすることも苦手だ。でも、明るい笑顔が職場を照らす。ハシダのある人を支えようと社内にてい感も生まれた。

林さんは4月、定年退職する。勤続50年の記念盾はタンスの上に飾った。母いゑさん(96)とは今も一緒に風呂に入っている。「お母

さん喜んでいた」とほおを緩ませた。



会社忘年会でかつての同僚たちと再会を喜ぶ林さん(左)。この日、勤続50年の表彰を受けた(昨年12月23日、川崎市高津区の日本理化学工業で) 浅水智紀撮影

# 社員の7割知的障害者

同社は、川崎と北海道美幌市に工場を持ち、チョーク製造では全国シェア(市場占有率)30%を誇るトック企業だ。全社員71人のうち知的障害者は7割超の54人に上る。うち重度が半数を越す。

もう一つの事業の柱であるハンガーのリサイクル事業が大幅な縮小に追い込まれたが、雇用維持はどうしても譲れない一線だった。新開発したホワイトボード用の固形マーカー「キットパス」を軌道に乗せた。

そのキットパスを担当する大田裕平さん(30)は入社12年目。重い自閉症で、子供の頃、頭突きで窓ガラス

を割ったこともある。父裕彦さん(56)は「いざ親は先に死んでしまふのに」と将来を悲観していた。だからこそ、息子が胸を張って明るく働く姿がうれしくてたまらない。

先日、夫婦で買い物をした東急ハンズの商品棚にキットパスを見つけ、目頭が熱くなった。裕彦さんは「企業の生産現場で商品を作る

という厳しさの中で働くから自信もつくのでしょう。こういう会社が少しでも増えてほしい」と願う。

「知的障害者は、人の幸せとは働くことなのだと思わせてくれた。企業はもうけることも大事だが、人に働く喜びを与えられることが大きい」と、日本理化学工業の大山泰弘会長(76)は話す。

障害者の雇用拡大に迷いがあつた頃、禅寺の僧侶に教えられた。「人の幸せは四つ。愛され、褒められ、役に立ち、必要とされること。働くことで少なくとも三つ手に入るんだよ」と。

「2面に続く」



いきがい ①

△1面から続く▽

日本理化学工業のような会社は、国内では珍しい。厚生労働省によると、国内にいる18〜64歳の障害者は325万人。勤労意欲の高まりはデータが示す。1998年度に8万人足らずだった障害者の求職者数は、07年度には11万人近く

# 「役に立たぬ人間いない」

に伸びた。この間、就職者数も2万人増の約4万6000人になったが、求職者の半数に届かなかった。障害者雇用促進法に基づき民間企業の法定雇用率は1・8%。従業員56人に1人の割合だ。達成企業は44・9%と、半数に満たない。こうした中で、景気悪化の影響が出始めている。2008年11月に解雇された障害者は前月からほぼ倍増の241人、12月は265

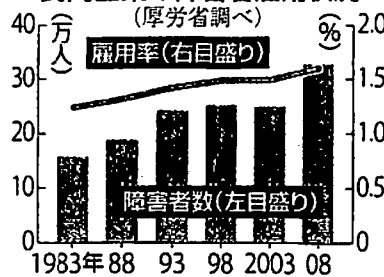


日本理化学工業の工場内は、障害者が働きやすいよう工夫されている

人に増えた。政府は、障害者を初めて雇った中小企業向けに奨励金(100万円)を創設したり、賃金の一部に充てる助成金を拡大したりする対策をとった。厚生労働省は雇用対策課の石川良国課長補佐は「障害者は『雇用は最後、失業は最初』といわれるが、そうであってはならない」と話す。

日本理化学工業では製造

◆民間企業の障害者雇用状況



ラインに様々な工夫をしてきた。計量用の重りは数字で覚えなくてもいいように色分けした。原料にのりを練り込む作業には、機械を動かす時間を計るのに砂時計を使う。1人でこなせな

い作業は単純な2、3の工程に分割する。工程に人を合わせるのではなく、能力に合った工程に組み直した。障害者の雇用を「負担」や「コスト」と否定的にとらえる企業は依然多い。しかし、大山さんは「企業活動に役立てない人間なんているものか」と問いかける。戦後ニッポンを築いた効率や成長優先という企業の論理は、様々なものを切り捨ててきた。「今、働く喜びまで切り捨てられようとしていて。それこそ会社の存在理由なのに……」